

☆背中の幼子は死んでいるのです

―明日敗戦記念日、未来にこのような光景を繰り返さないために―

☆J・オダネルの写真「焼き場に立つ少年」

◆左の写真は、米国の報道写真家J・オダネル氏が1945年9月、被爆地長崎の臨時の焼き場に現れた幼子を背負った少年の姿を撮ったものです。

◆被曝した人々は次々と原爆症で亡くなっているのです。眠っているように見える背中の幼子は実はすでに死んでいるのです。親も亡くしたのか、この少年は一人で、死んだ幼子を臨時の焼き場に背負ってきたのでした。

☆戦後六十六年、このような光景を再び繰り返してはならない

◆オダネル氏は、この出来事を「背筋が凍るような光景でした」と語っています。戦争の悲惨さとともに、「涙も悲しみも」唇の血とともに直立で耐えた少年の姿に、この戦争を遂行した日本の軍国主義教育の影を見てしまったのです。

◆再び悲しみの記念日がめぐってきます。大震災と原発事故が重なった今年、戦争そして原爆（核兵器）がもたらした六十六年前のこの光景は、私たちに何を語っているのでしょうか。



この時私は、背中の幼児がすでに死んでいることに初めて気がつきました。男達は幼児の手と足を持つとゆっくりと葬るように焼き場の熱い灰の上に横たえました。

まず幼い肉体が火に溶けるようにジューという音がしました。それからまばゆいほどの炎がさっと舞い上がりました。（中略）

その時です、炎を食い入るように見つめる少年の唇に血がにじんでいるのに気がついたのは。少年があまりにもきつく噛みしめているため、唇の血は流れることなく、ただ少年の下唇に赤くにじんでいました。（朝日新聞社主催「写真が語る 20 世紀―目撃者―」展 1999 年へのオダネル氏のコメント抜粋）

二〇一一年八月十四日（日） 第五三四回憲法を守る平和行進
浜松市憲法を守る会 事務局 浜松市中区紺屋町三〇―一―五
★月例護憲平和行進 毎月第二日曜日・午後一時・浜松市役所正面玄関集合

◇「2011年・平和のつどい」のお知らせ（8月15日 午後一時半より）
映画「ひめゆり」の柴田昌平監督を囲んで平和の思いを語り合う集いが
シネマ・イーラ（中区田町）でもたれます。主催 浜松・憲法9条の会。無料。